

# 高校生にもできるステナブルファッション アパレル業界が環境にもたらす社会的影響とその対策について

## 【アブストラクト】

現在、服の産業形態が問題となっている。ファストファッションが流行することにより、そのために低賃金労働が問題とされるエシカル(倫理)ファッションや大量生産の裏で大量廃棄が行われているサステナブル(継続性)ファッションの必要性が注目され、SDGsを中心に問題視されているのだ。世界で呼びかけが広まっている一方で、一般に費用や手間の面から民衆の取り組みはうまく進まず、停滞状態を続けている。我々はそこに目をつけ、少しでも多くの人がこのファッションの現状を知り、より良い生産活動が展開されていくことを目指し、活動を始めた。

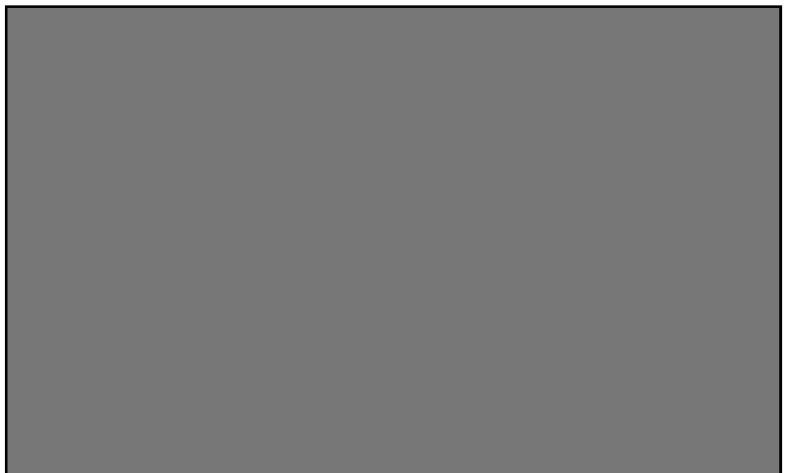
その方法として、今現在若者の服消費が多い傾向にあり、実際様々な統計で10代から20代前半の消費活動が懸念されている。そのため、高校生にスポットを当て取り組んでいくことを決めた。また、高校生の多忙さや特性を考えたときに3Rの中でも、そのままの状態を保ったまま、受け継いでいくことのできるリユース(再利用)がもっとも効果的で現実的だと考え、古着を中心に消費活動の取り組み方の提唱を目指すことにした。様々な取り組みを通じて、高校生にサステナブルファッションの周知を促進すると同時に、我々としてサステナブルな取り組みを考え、それを伝えるというサイクルを導いた。

・サステナブルファッション ・大量消費社会 ・高校生

## 1 はじめに

現代社会では、衣服は生活の中で必要なものとなっているだけでなく、自分を示すアイデンティティとして、また時代の流行を示すアイテムとして幅広く活用されており、日本国内でも需要は日々高まっている。

しかしながら、社会で問題となっている一つが「服の生産」である。安い値段で様々なファッションを楽しむファストファッションが巷で流行し、あらゆる人々がおしゃれを気軽に楽しめるようになった反面、販売会社が大量生産を行うために立場の弱い人々を安価で雇う人権問題や、服の生産量の増加による廃棄量の増加、生産の効率化を目指した化学物質の使用などの様々な問題が発生している。特に服の廃棄に関しては服一枚の製造あたりに必要なものは水2300L、二酸化炭素25.5kgと膨大な量がかかる割に年間に捨てられる服の量は480000tと非常に多く、環境負荷が著しい分野となっている。そこで我々は、この問題に少しでも貢献できることをしたいと考えた。

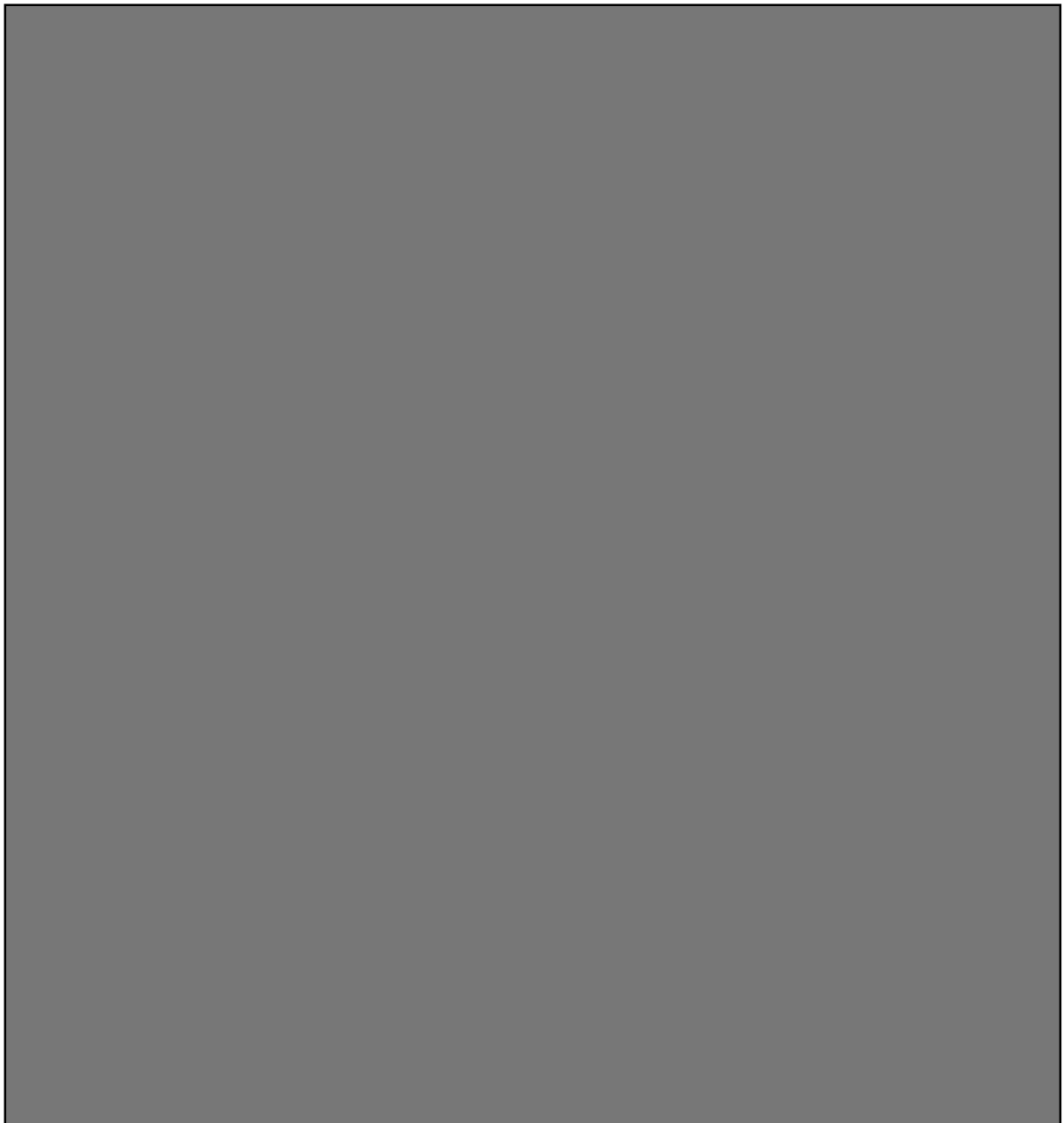


探究活動を始めるにあたり、現代社会の問題となっていることを広く調べ、人権問題や、政治問題など今の社会の問題について学び、またサステナブルファッションという言葉を知った。サステナブルファッションとは、

「衣服の生産から着用、廃棄に至るプロセスにおいて将来にわたり持続可能であることを目指し、生態系を含む地球環境や関わる人・社会に配慮した取り組みのこと」（「環境省 サステナブルファッション」より）

であり、現代社会が抱える衣服に関する問題をSDGsを通じて取り組みが進んでいる。様々な衣服に関する探究活動案が出たが、サステナブルファッションを促進するというのは、服の生産問題や、二酸化炭素や水についての環境汚染関連の世界的な環境問題の解消に発展することは勿論、もともと服飾業界に興味があった我々にとっても服をより長期的に楽しむことができるようになると考え、自分たちの幸せを含める活動が社会全体の利益により繋がっていくと思い、サステナブルファッションの促進を目指すことにした。またSDGsの一環として環境に優しい衣服サイクルを作っている人々が多くいることを知り、その一部として我々も活動を始めることに決めた。

【日本経済新聞 2013年4月24日】

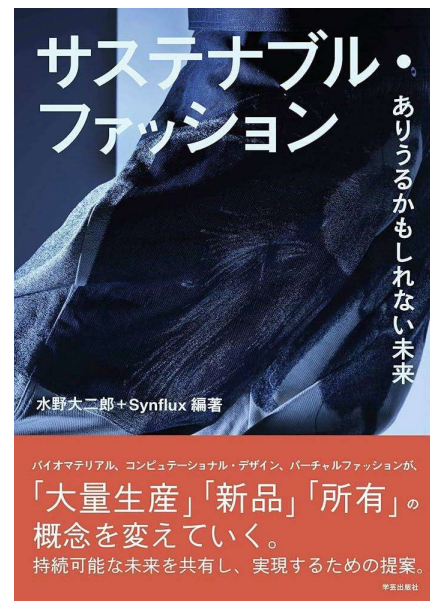


また、調べていると2013年におきたバングラデシュでの繊維工場の倒壊事件について発見した。この事件では、中に労働状況の悪い労働者が多く働き、経営側の人間だけが避難しており、倒壊と共に、労働条件の問題が示唆されたものであった。しかしながら、様々な情報機関によると、ファストファッションの導入などにより、労働条件は改善されるどころかむしろ悪化の道をたどっているという。そこで我々は、改めてこのファッション業界の問題の大きさと幅広さを感じ、いち早くこの問題の重要性と緊急性を感じた。

また、服飾業界の内情を調べるうちに、その分野に関する本がいくつも出版されているということを知った。その中で仲村和代氏と藤原さつき氏による著書「大量廃棄社会 アパレルとコンビニの不都合な真実」を読み、ファストファッションの流行による、古い服から新しい服へと次々変わっていく現代の中でそれにあたって利益を求めて多くの低賃金労働者の利用と大量生産がベースとなる一方で売れ残りによる廃棄が増え続けるという現象、リサイクルという名により罪悪感は減少しつつも使い道がなく、最終的にどこかの廃棄に回され少しも解決の糸口にはなっていない現実など、言葉ではSDGs、サステナブルファッションなど様々な考えが浮かんでくるが、実際にはうわべだけに過ぎず、根本からの解決を目指す人が非常に少ないというこの世の「おかしさ」を感じるきっかけとなった。



それから水野大二郎氏による「サステナブル・ファッション:ありうるかもしれない未来」では、テーマを「大量生産」「新品」「所有」の概念を変える、というものにし、微生物を培養した生地やコンピュータ・アルゴリズムを使った合理的な生産と販売、現実と仮想現実を利用した最新のファッションなど、現代騒がれているサステナブルファッションをより科学的な視点からアプローチすることを提案するというもので、3Rなどの典型的なものに縛られていた自分のなかのサステナブルファッションの考え方が変化し、society5.0などより情報化や技術革新が進むこの世の中に生きる我々の生活と持続可能なファッション形態をどのように結びつけ昇進させていくことができるのかを考えさせられた。



## II 研究方法

この研究の目的は環境負荷の多い現代服飾産業の解決策の提案をすることである。そのため問題の現状を詳細に把握し、対象者である高校生に対する課題をどのように解決していくかを考えていく必要があると考えた。またその解決策を下に実践を行ってもらえるよう、サイクルの作成も念頭に入れながら考えることにした。

### 〈概要〉

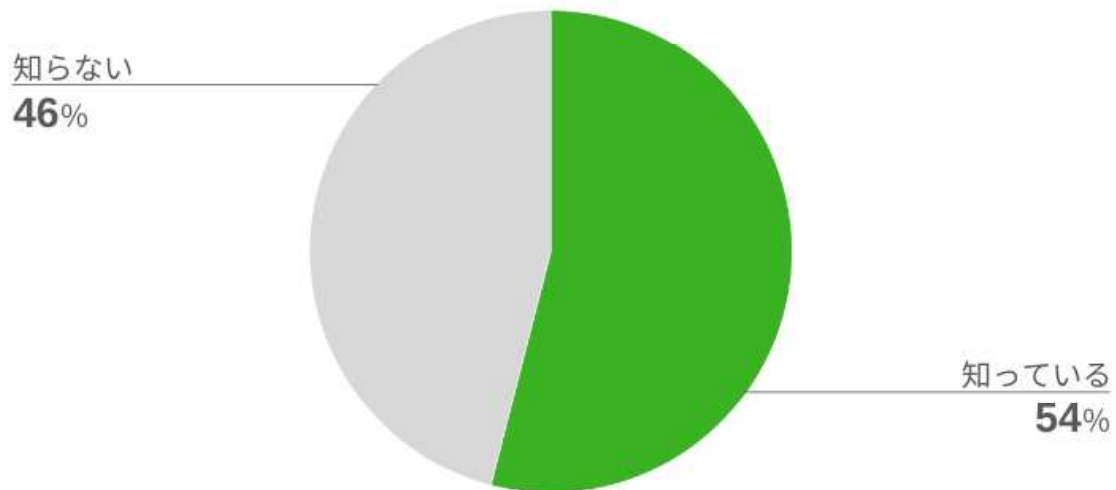
- ①ファッション業界の環境負荷を把握する
- ②環境負荷を減らすためにすでに提案されている方策を調べる(先行研究調査)
- ③経済的な負担の少ない方策を中心に深く調べる

- ④高校生でも実現しやすい方策を考案し実践する
- ⑤サステナブルファッションの課題について改めて考察する

### III 研究過程

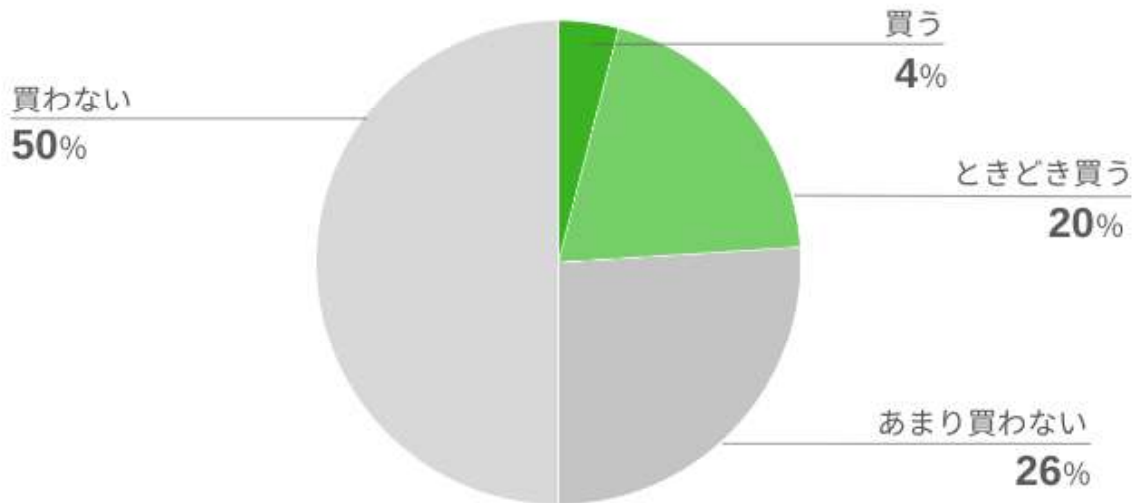
様々なサステナブルファッションには主にリデュース、リユース、リサイクルの3つの構成要素からなるが、我々の場合、活動期間が約二年と有限の活動であったため、ターゲットを絞り、直接的かつ効果的なものを念頭に話し合った。その結果、服の消費量が多く、安いものを選びがちな若者に焦点を当て、そのままの形を保ったまま、もしくは少しアレンジを加えた状態で服を扱うリユースで促進していくのが最も効率が良いのではないかという結論に至った。そこで「高校生にもできるサステナブルファッション」というテーマで活動を始めた。具体的な活動を始める前に、まず高校生のサステナブルファッションや古着に対する印象を知ることを目的とした三高生へのアンケートを実施した。

## サステナブルファッションという言葉を知っているか

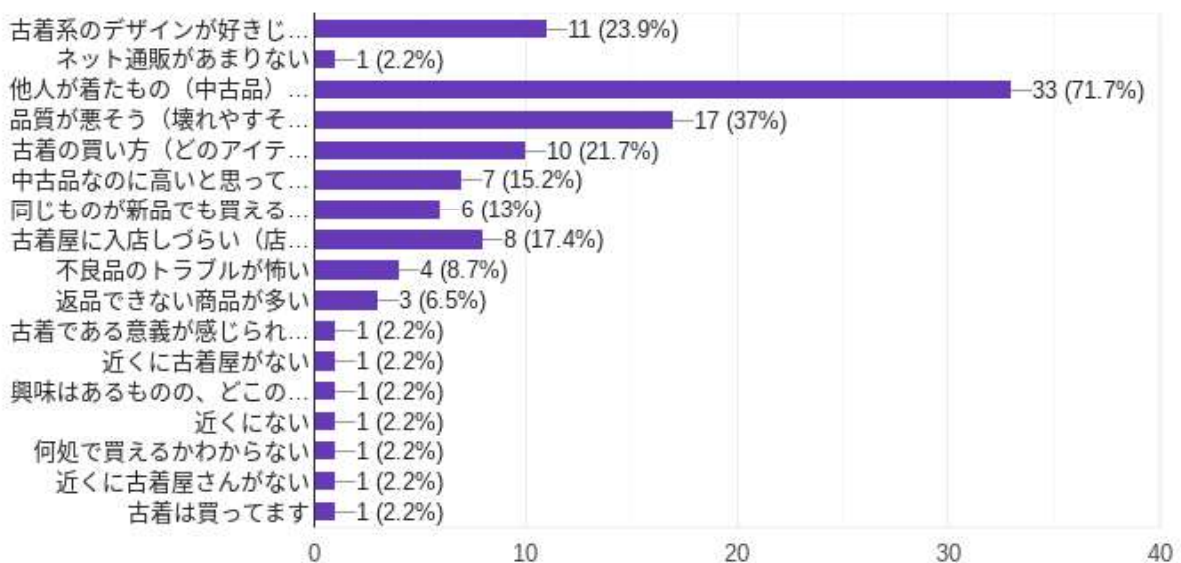


複数の内容についてアンケートを取ったが、その一つである「サステナブルファッションという言葉を知っているか」という質問では54%と約半分の認知にとどまり、まだまだ高校生の環境意識は低く、特に服飾業分野との環境的結びつきが薄いという印象を持った。

## 普段古着を買うか

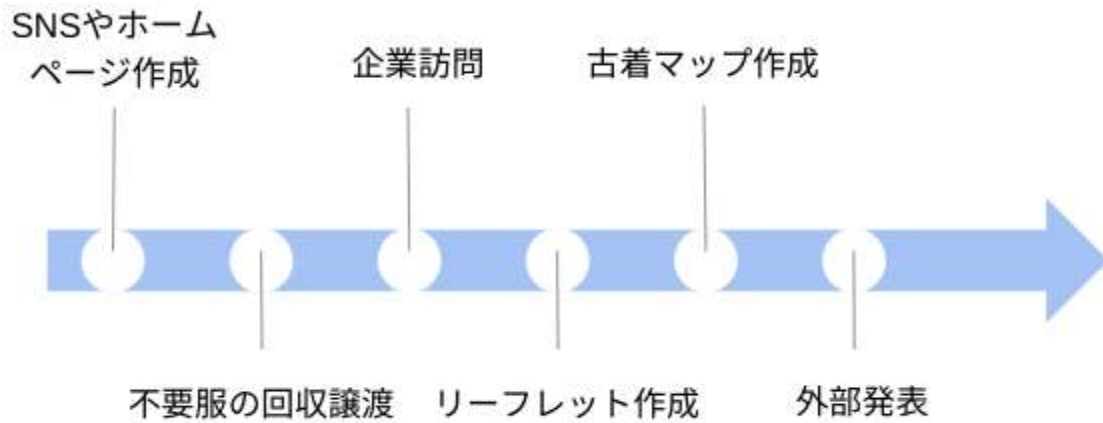


また「普段古着を買うか」という質問では、買う・ときどき買うと答えた人々が24%と低い数値にとどまった。また、全く買わないという人が半分と、古着に対しての好印象が感じられない結果となった。



それから、古着に対するマイナスイメージを感じるかという質問では、多い・それなりに多いと答えた人が66.7%と約3分の2の人が否定的印象を抱えていることを知り、その理由として、他人が来たものに抵抗があることから着たいと思えないという人が多いという結果となった。このことからまず人々の環境意識を構築し、そこから古着と環境問題についての結びつきを広め、古着の印象改善と普及を目指すことにした。

また手順としては以下の時系列で進み、はじめにだんたいとしての団体としての基盤とできるものを起こした後に三高内で活動を行いそこから外部に広げ取り組みを進ませ、最後に自分たちの提唱として、また意見交換として発表を行った。



### ①FIRとしてのSNSやホームページ作成



探究61班として活動をするというのは、活動内容が分かりづらく、注目を浴びにくいということから、自らを「FIRーFashion is Reusable」という肩書に変えることにした。また、それに先立って、探究用Instagramアカウントやホームページを立ち上げ、エシカルファッション・サステナブルファッションについての概要から今までの活動とこれからの展望、服の譲渡に関する情報などまでをまとめるプラットフォームを作ることにした。また、FIRのロゴを作り、具体的な活動を始める前に、多くの人々にとってイメージしやすいものを作成しようと尽力した。三高生徒を中心に多くの人々にみてもらい、我々の活動とサス

テナブルファッションについての普及を行った。

### ②不要服の回収・譲渡





三高生から不要な服を回収  
「古着ポスト」

回収した服を古着として文化祭で  
展示・譲渡

余った服はSNSを利用して  
発信・譲渡

リユース促進  
サステナブルファッション  
への意欲増進

三高生から着なくなった服を回収してそれを文化祭で展示・譲渡することでサステナブルファッションを促進する計画をした。夏季休業中である7月下旬から8月末にかけて「古着ポスト」として回収用ボックスを校舎内の昇降口前に設置した。はじめは寄付者が現れないなど先行きが危ぶまれたが、後々予

想以上に反響があり、子供服から、小物類やジャケットまで、40着近くの服を回収することができた。また品質が良いものや有名ブランドのものも多く、古着の魅力を発見してもらうにはとてもよい条件のもと、回収プロセスは幕を閉じた。

回収できた服を、もう一度利用してくれる人を探そうと文化祭に出店した。装飾などの店の準備を進め、より多くの人に目を止めてもらえるよう、様々な工夫を凝らしたが、観覧はするものの引き取り手はほとんど現れず、終わってしまった。このことから、服の処分のプロセスには多くの関心があるものの、それを利用するという点においてはまだまだ懸念意識が強く、難しいことを知った。

### ③企業への訪問



古着の譲渡の難しさを知ると同時に、サステナブルファッションのより良い取り組み方はないのかを知りたいと考え、他の古着促進のアプローチや、サステナブルファッションの取り組み方を模索するため、12月の修学旅行の際に企業の訪問学習を行った。京都を拠点にエシカルファッションやサステナブルファッションに取り組んでいる企業であり、アフリカ国からの綿糸輸入に対しての問題や、持続性のある生産・販売活動を行っている「シサム工房」という企業を訪問させていただき、世界の

服飾の環境問題を学んだ。ももとは我々と同じように譲渡回収を行っていたということから、リユースプロ

活動を通して、自分たちだけの世界に留まらず、より多くのトライアンドエラーを経験することができ、自分たちの探究活動を客観的な視点で分析することにつながったことが成果であると考え。

修学旅行の際には、京都市にあるシサム工房さんを訪問させていただき、オーガニックコットン製の肌着など、農薬による環境負荷などにも配慮した服の販売についてのお話を聞いたり、現地で綿花を栽培している人たちの人権問題についても、詳しい話を聞くことができたりした。

その後は外部発表にも参加し、同じ高校生との活発な意見交換を通して、新たな解決の糸口を見出すことにつながったことに加え、自分たちの取り組みをスライドにまとめる作業の過程で、自分たちの活動について軽い振り返りが出来たことや、発表を通してサステナブルファッションについてまた多くの人に知ってもらった機会を得られた。

しかし、服の問題について、廃棄問題や環境問題だけにフォーカスして解決するよりも、他の問題との関係性を意識して根本的な解決につながるような方策を提案しきれなかったことが、班としての課題であると考えている。

## ②個人としての考察

個人としては、今話題になっている環境問題について様々なものがあるが、その中には自分の意志とは反対のことが要求されることもあり、多くのジレンマが起こることもあるため、その中で自分が好きであり、社会にも求められる活動を行えたというのは喜ばしいことでまた、その自他が同意できる活動によってより自発的な活動ができたと感じている。

しかしながら、ターゲットを「高校生」という不特定多数の範囲に設定したもののアンケート範囲が限られた範囲にしか取ることができなかつたり、活動範囲が三高内であるものが多かつたりと、自分たちが望む範囲での需要を供給で満たすことができなかつたという反省を抱いた。また、範囲を高校生としたことにより、それ以外の範囲に目を向けることが足りておらず、新たな方策を考えることが難しく、中々次のステップを踏むということが難しかった。

我々が小さなことからはじめ、サステナブルファッションを促進する一方で、世界では日々、衣服の大量生産・大量廃棄が行われており、一部の地域で進んだとしても、全体として成果はほとんど見られないというのが現実である。しかしながら、何も行わなければ、少しも変わらないというのも事実であるため、少しでも一人ひとりが活動を意識することで、初めて何かが変わるのかもしれない。そのためには一人ひとりが残酷な現在の状況を知る必要があるため、この活動を自分たちのインプットで終わらせず、まだわかっていない人へ伝えていくことが、今回の探究活動の意義だと考えた。

## V 終わりに

はじめは探究活動というものがわからず、何をどのように取り組めばいいのかわからない状態での始まりでしたが、徐々に世界の情勢とともに理解が深まっていき、また自分がこの取り組みの何かを変えていきたいと気持ちを持って取り組むことができるようになっていきました。特別なにか大きなことをすることはできませんでしたが、考察でも書いた通り、小さなことの一つ一つが何千何万と積もったとき少し変化が出てくるものだと思うので、この探究としてだけでなく、個人としても、少し知識を得た者としてこれからも促進していきたいと思えます。

最後になりますが、外部発表の際、熱心な指導をくださったマイプロジェクトの方々へ感謝の意を表します。また、企業訪問として、様々なアイデアをくださり、我々の探究活動についてのアドバイスをくださったシサム工房の皆様、本当にありがとうございました。

また、アンケートや古着回収・譲渡、仙台第三高校の多くの方々に協力いただきました。探究活動の方針をはじめ、様々な相談に乗ってくださった鈴木伸之先生、心より感謝します。